

第1回豊田市総合計画審議会 会議録

【日 時】 令和5年5月31日（水）午後3時00分～5時30分

【場 所】 豊田市役所南51会議室（南庁舎5階）

【出席者】

（委 員）

阿垣 剛史	豊田市区長会会長
浅野 智恵美	市民公募
稲垣 博貴	（一社）豊田青年会議所理事長
稲垣 令一	豊田市高齢者クラブ連合会会長
大橋 宏	豊田信用金庫理事
加藤 真二	（一社）豊田加茂医師会会長
加納 実久	新とよパークパートナーズ会長 名古屋工業大学研究員
木村 匡子	関西大学社会学部准教授
幸村 的美	（社福）豊田市社会福祉協議会会長
澁澤 寿一	NPO法人共存の森ネットワーク理事長
鈴木 学	豊田市副市長
豊田 彬子	（公財）豊田市国際交流協会理事長
永田 祐	同志社大学社会学部教授
中野 貴博	中京大学スポーツ科学部教授
野崎 健太郎	豊田市PTA連絡協議会副会長
畑中 直樹	大阪大学大学院工学研究科招聘教員
早川 信	あいち豊田農業協同組合常務理事
弘中 史子	中京大学総合政策学部教授
牧野 篤	東京大学大学院教育学研究科教授
松本 幸正	名城大学理工学部教授
丸井 康弘	市民公募
湊 裕	連合愛知豊田地域協議会事務局長
安田 明弘	豊田市副市長
吉村 一孝	豊田商工会議所専務理事

（計24人）

【欠席者】

（委 員）

大澤 正彦	日本大学文理学部情報科学科准教授 次世代社会研究センター長
-------	----------------------------------

【理事者】

太田 稔彦	（豊田市長）		
（事務局） 辻 邦恵	（企画政策部長）	都築 和夫	（企画政策部副部長）
阿久津 正典	（企画政策部副参事）		

野依 真人	(企画課長)	花田 潤治	(都市計画課長)
丹羽 広和	(企画課副課長)	大光 圭二	(都市計画課副課長)
		今村 広和	(都市計画課主幹)
宮川 恭子	(企画課担当長)	西岡 雄志	(都市計画課担当長)
古田 祥久	(企画課主査)	加納 崇壮	(都市計画課主査)

【傍聴人】 2名

- 【議 題】
- 1 委嘱状交付
 - 2 市長あいさつ
 - 3 委員紹介
 - 4 議題
 - (1) 会長・副会長の選任
 - (2) 諮問
 - (3) 審議会の運営について
 - (4) 第9次総合計画 策定方針について
 - (5) 豊田市を取り巻く環境について
 - (6) 「(仮称) ミライビジョン2050 (案)」及び「都市構造 (案)」
 - 5 その他
 - (1) 次回の開催について
 - ・ 令和5年7月24日

【議 事】

■ 委嘱状交付

■ 市長あいさつ

○市長

■ 委員紹介 一人ずつ自己紹介

■ 議題(1) 会長・副会長の選任 会長に牧野篤委員、副会長に中野貴博委員を選任

■ 議題(2) 諮問 豊田市長より会長に諮問書を伝達

■ 会長あいさつ

○会長

今回、第9次総合計画の御審議をお願いすることになります。この激動の時代に、総合計画というものが成り立つのかどうかということも含めて、忌憚のない御意見をお願いしたいと思います。

先日、学生達にコロナが終わってどうか聞いたところ、コロナが終わってようやく令和が始まりましたね、ずっと昭和であった感じがする、と言われました。阪神淡路大震災、オウム事件、東日本大震災、そしていわゆるバブルの時代から、株価が急激に下がるなど経済においても激動の時代であったにもかかわらず、平成という時代はなく、昭和という時代の蓋がずっと被さっていた。彼らの感覚の中では、自分達が生まれてからずっと下り坂であり、今コロナが終わってようやく令和という新しい時代が始まりそうな予感がするということでした。

私は、高度経済成長の頃の生まれであり、基本的にずっと上り調子で来て、大学の教員になったころから状況が悪化し始め、30年経った感覚ですが、自分の学生としては、ずっと変わらない感じがあった中で、これから変わる、良くなっていくという明るい兆しを感じているという印象を持ちました。

激動の時代と言われる中で、工業社会からポスト工業社会に入っていく過程でコロナが起こり、今年は5月に梅雨入りをするなど、気候変動が待ったなしの課題として出てきています。

総合計画において、新しい社会を展望しながら、次の世代が希望を持てるような、地図ではなく羅針盤のような道筋を示すことができればと期待しています。

本日、24名の委員の方に御参集いただき審議会が開催されていますが、豊田市民の方に、それぞれの立場から生活の実感に基づいて御発言いただき、それに対して専門家と言われる私たち大学研究者が説明を加えつつ、この社会の在り方について共通認識を図りながら、計画の議論ができると良いと考えています。

ぜひとも率直に御議論いただきたいと考えています。よろしくお願いいたします。

■ 議題（3）審議会の運営について

○事務局 別紙に基づいて説明

■ 議題（4）第9次総合計画 策定方針について

○事務局 資料1に基づいて説明

■ 議題（5）豊田市を取り巻く環境について

○事務局 資料2に基づいて説明

■ 議題（6）「（仮称）ミライビジョン2050（案）」及び「都市構造（案）」

○事務局 資料3に基づいて説明

■ 意見交換

（会長）

資料①から資料③まで、現状の理解から、第9次総合計画の基本的な方向性を御説明いただきました。ここで、本日御欠席のA委員からビデオメッセージを頂きましたので御紹介します。

○A委員からのビデオメッセージ

(会長)

前半は生成AIがメッセージを作り、それをA委員は読んでいた、ということです。

いかがだったでしょうか。あまり違和感を覚えなかったのではないのでしょうか。

今話題になっている生成AIやChatGPT(チャットGPT)がどんどん展開していく中で、VUCA時代の計画の在り方はどうあるべきか、皆さんに御議論いただければと思います。

第8次総合計画の大きなテーマが「つながる つくる暮らし楽しむまち・とよた」であり、当時の中核都市の計画としては極めて珍しいテーマであると言われました。経済発展、人口、社会構造をどうするかに加え、市民一人ひとりが主役として活躍できるまちを目指し、基本的な考え方として「つながり」をつくるとしました。その結果、一人ひとりが楽しむこと、自分自身の幸せが、市全体の楽しさにつながっていく、そういう考え方で作られたのが第8次総合計画でした。

「つながり」について、一定の達成度にあるという中間評価になっています。第9次総合計画では、つながりは基本的に継承し、さらに、チェンジとチャレンジを繰り返し、しなやかに成長するまちということが謳われています。

最初の資料①にあるように、従来のように目的達成型の計画、地図を描き、逆算する方式ではなく、むしろ羅針盤を持って、見直しをしながら次へ次へとより良くしていくというような作り方をするということだと思えます。

また、既成概念を壊しながら、学びほぐし(アンラーン)や、学び直し(リラーン)を続けることで、自ら既成概念から解放され、それが新しいアンラーンにつながる、次へ次へと循環を繰り返し、周りに拡大しながらつながるような、そういう形で第9次総合計画が考えられないかと思っています。

また、都市の構造の在り方についても、ウェルビーイングが関わってくるのではないかと考えています。

6月に閣議決定される第4期の教育基本振興計画の策定に関わりましたが、大きなテーマが二つ掲げられました。一つはウェルビーイングを実現していくこと、もう一つは持続可能な社会の担い手を育成するということです。

ウェルビーイングは、より良く生きる、幸せを感じられるような生活の在り方を言います。従来の個人のウェルビーイングから、協調的なウェルビーイングを重視することが議論されました。個人が幸せを感じられるように環境をどう整えるのか、一人だけのウェルビーイングではなくて、自分自身のウェルビーイングが全体のウェルビーイングにつながるような構成で、社会の在り方や、教育というものをどう考えるかという議論をしました。

その結果、今までは経済が発展することによって財源を確保し、教育にお金を回すという考え方でしたが、第4次教育振興計画は、逆に、教育が先行することによって人を育成し、それが新しい経済や社会を回していき、その過程でウェルビーイングが実現するという構成で検討されています。

教育のベースは学校教育ですが、人生100年時代において、学校教育が関われるのは、幼児教育から高校までの15年間に限られ、その後は学び直し続けなければならない社会になっています。80年間自分で学んでいく、そのために社会の在り方をどうするか、教育の仕組み

をどう変えるのかという議論をしなければなりません。

ウェルビーイングや持続可能性、そしてネットワーク型の社会、その基本は日常生活を人々がどう送るかということに関わるだろうと思っています。

(B委員)

人口動態について、人口だけは予測不可能ではなく、確実に高齢化や人口減少が進むと思います。その場合、健康なお年寄りがどれくらいになるか予測がつかますか。

コンパクトシティというと山村部はどこかに集約していくと思います。みんな元気であれば、分散して暮らすことも可能ですが、健康寿命が延びないのであれば、病院に入ることもあり、難しいと考えます。健康に年を取られた方の割合について、事務局で資料がありますか。

(事務局)

資料②-3「第8次総合計画の取組状況」の8ページに、まちの状態指標の状況として、健康寿命を記載しています。2020年度は数値が上がってきており、徐々に健康寿命が延伸していると思っています。

要支援・要支援要介護者の認定率についても、概ね順調に進んでいると思っており、人生100年時代の中で、健康寿命についても取組が進んでいると考えています。

(B委員)

健康な方の分布はどうなっていますか。都市部に健康な方が多いのか、山村部に多いのかについてはいかがでしょうか。山村部で健康な方が多ければ、これからの地域のコミュニティが維持できると思いますが、そうでないと難しいと考えます。

(事務局)

山村地域は色々な活動をされているので健康な方が多い印象ですが、地域ごとの分布は数字的には把握していません。

(会長)

事務局の宿題ということでよろしくお願いします。

(C委員)

藤岡地区は、日本一若い町と言われた地域ですが、それなりに高齢化しています。環境が良いので、元気なのではないかという思いはあります。ただ、合併後、都市計画法があって色々な問題で制約もあり、奥の方、山間地域だと自然に人口が減っていますが、藤岡支所付近だと豊田市役所にも30分から40分で出られます。総合計画でいうと、人口について、過疎化が進んでいると感じているので、今後検討していただきたいと思います。

(会長)

環境が良く、元気ではないかということですが、過疎化、高齢化という課題があるという御発言かと思えます。

(D委員)

俯瞰した感想ですが、山の議論とまちの議論は二元論化しないことが原則だと思っており、豊田市はそれができる地域だと思っています。

私も第8次総合計画の策定に関わりましたが、「つながる つくる 暮らし楽しむ」を、今ほど実感することはなく、本当にコロナでつながれない3年間だったと感じます。それがやっと今つながれるようになって、これからの時代にこそ、このテーマは相応しいと改めて

思います。

それから、「成長」という言葉が若干気になります。「成長」は英語でいうとデベロップメント（development（質の変化））とグロース（growth（量の変化））があり、グロースを狙っているのではないかと感じます。経済成長をすべてのことに最優先にしてきたのが私の世代であり、成功した部分と失敗した部分があります。これからのウェルビーイングでは、DOではなく、BEを目指す、グロースではなく、デベロップメント、質を充実させていくという発想が必要だと思えます。

企業でも労働生産性をずっと目指してきました。これからは資源生産性、これだけの自然資源をどう有効に使っていくかが重要と考えます。ものを丁寧に残さず使い、手間をかける昔の暮らしに答えがあるのかもしれませんが。「生産性」ということをもう一度議論していきたいと思えます。特に「成長」という言語は注意して使っていくべきと考えます。

資料に「豊かな自然をこれからも次世代に継承」とありますが、山側、環境の人間として、こんなこと言っている時代ではないと感じています。世界の食料・エネルギー事情、地球の実情を見ても、私たちの生活のベースになる生産財をいかに有効に利用できるかというのが重要な視点になっていくと思っています。

（会長）

地区別の人口動態も含めて、都市部と山間部両方持った都市として、二元論化した議論ではなく、俯瞰しながら、交流人口を含めて考え、また、どういう形で資源を使い、過疎地域としても持続可能性を持った社会の在り方を構想していくか、その検討が必要ではないかという御指摘だったと思えます。今まではグロース、経済成長を中心に考えてきましたが、これからはデベロップメント、質的な転換を考える必要があるという御発言だったと思えます。

（E委員）

D委員から世界の食料事情という言葉も出てきましたが、第9次総合計画が地球益につながると良いと思っています。

私は消費生活研究所に所属しており、「食品ロス削減」に関する論文を書いてインターネットサイトに掲載しています。活動のメンバーに益富地区在住の元トヨタ自動車の方で、消費者庁の食品ロス削減推進サポーターの方がいます。

資料②-1「心の豊かさ」の項目に、「市民一人ひとりの主体的な関わりを引き出すことで、地域への愛着・誇りの形成につながる」と書かれています。また、資料③-1「行動を変える」として「主体的に物事を捉え、行動につなげていく」とあります。これは、きれいな言葉ですが実現は難しいと感じています。

先ほど御紹介した方は、自ら食品ロス削減を地域に広げたいということで、益富校区にある4つの小学校区の回覧板にパンフレットを入れられました。こういう方がどんどん増えていくと良いと思っています。人生100年時代において自ら行動する、そういう方の育成ができるような第9次総合計画になると良いと思っています。

（会長）

豊田市の課題は豊田市だけではない、世界的な課題とつながっているということ、意識を変えながら行動する市民をどう育成していくか、それを第9次総合計画にどう反映していくかということだったと思えます。

（F委員）

「(仮称)ミライビジョン2050」の案、面白いと思うし、これで良いと思っています。継承していくもの、進化していくものも良いと思います。

市の総合的な施策の方針ということで、「3つの変える」を意識するとあります。共働を打ち出していますので、市民の方々にもお願いしたいところではありますが、それ以前に内部、行政が変わっていかないといけないと思っています。見方を変える、思考を変える、行動を変える、「3つの変える」はすごく良いと思っています。

行政内部にこのメッセージを流して欲しいし、それが市民に伝わっていくと思います。そういう作り方はできますか。あるいはそれを意識してこのような方針を立てていただいているのかということをお伺いしたいです。

(事務局)

御発言のとおり、まずは当然、職員が意識しないといけないと考えています。

皆さんに配布した第8次総合計画の冊子はこれだけ分厚いので、市民の方に読んでいただくことは難しく、伝え方、見せ方についても、職員や市民の方にも分かるように変えていきたいと思っています。市民の方にも、策定過程において考え方を伝えていきたいと思っています。

(F委員)

行政内部が変わることが、この総合計画のめざす姿の実現に一番近づくとおもいます。

ところが、資料①を見ますと、市民と行政の共働と書かれているところ、「自らの部局の目標や施策を整理する」とあり、それでは変わっていないと思います。部局でやるのではなく、組織に横串を刺して、壁を取り払ってやっていく。それがVUCA時代に求められる姿であり、第9次総合計画でやっていこうということだと思いますが、まだ十分整理できていない。意気込みとして、よし、変わるんだということはこの総合計画で見せられると良いと思います。

資料最後に「都市構造」もありますが、都市計画の部門だけではできない。いろんな分野と連携し、産業、教育、福祉、みんなで協力していかないと、都市計画部局だけでは描いた姿を実現できない。もっとスピーディにやっていこうと思ったら、部局の壁を破り、壁を取り払ってやっていくことが必要で、それが変わるということだと考えます。

(会長)

縦割りを壊し、融合するということ、新しい行政の在り方を展望して、行政がまず変わるということ、民主主義や自治とは何かということを考えなければならない時代になったという御発言だと思います。9 総の考え方、組織の在り方について考えていきたいと思っています。

(G委員)

D委員の話に大変共感しながら話を聞きました。本日の議論は、方針など、入り口の段階ですので、まだ詳しい状況は分かりませんが、より便利な生活、インフラをいかに高度化していくかという議論でないことを嬉しく思います。高度なインフラ整備を他市から羨まれるのではなく、豊田市の真似をすればきっと同じまちづくりができる、と見本になるような総合計画だと良いと思っています。

御存じの方もいらっしゃるかと思いますが、昔、南米のウルグアイの大統領ホセ・ムヒカという方が、先進国、発展途上国の人達が一緒になったサミットの会議で演説した内容を御紹介します。このサミットでは、先進国の人達の発言が多く、発展途上国の人をいかに発展

させるかという議論がされました。ホセ・ムヒカ大統領は「私達、発展途上国のために議論
いただいてありがとうございました。一つ質問させてください。私たちが先進国と同じ便利
な財産、例えば、箱物や車など、ものを豊かにする国を作るといえることですか。その結果、
ものを作るためのためにいろんな資源を世界中で取り合っていないですか。どこまでが味方で
どこまでが競争相手なのですか。そんなことを考えさせるサミットでは意味がないのではな
いですか」と発言をされたそうです。満たされている人は更にものを欲しがり、際限のない
世界を作っていく、それはかえって貧しい人をつくることになります。

昔の賢人、エピクロス、セネカ、マイマラ民族は、貧乏な人とは少ししかものを持ってい
ない人ではなく、無限に欲があり、いくらあっても満足しない人だと言っています。まさに
先進国の人のことを言っているのかなと思います。

豊田市も、発展したまちづくりというよりも、人間関係をいかにうまく作れるか、そのた
めの行政としての制度や支援が計画の中に織り込まれると良いと思いました。

(会長)

ものを豊かにする今までの経済、数字や量で測れるような発展の在り方ではなく、多様性
や質的な豊かさを考えるようなまちの在り方もあるのではないかという御指摘だと思います。

私の専門の教育学も人間を「発達する」という場面で、経済の発達と同じようなロジック
で捉えてきた面があります。一人ひとり違う人間としてではなく、集団、量として、国民と
か団体として捉えてきましたが、そういう時代ではないということかと思います。

一つの事例ですけども、イースタリンの逆説という議論があります。GDPが上がり、もの
が持てることが私たちの世代は幸せでしたが、今の若者たちはGDPが上がると苦しくなる、
負担が増えるという感覚がある、ということが指摘されています。経済産業研究所の調査研
究でも、人生の幸福感と学歴やものを所有することが、ほとんど相関がなくなっているとい
う結果が出ています。

幸福感に寄与する三つの要素は、健康、良い人間関係、自己決定であり、ものを増やして
いく、量を増やしていく時代ではないと言われています。豊田市が先陣を切って、全国から
羨まれるのではなく、さすが豊田市と言われる、真似をしたいと思われるような計画を作れ
ないかということだと思います。

(H委員)

自分の専門領域は子どもの運動です。子ども、若い世代の視点から感じていることをお話
します。

先ほどのグロースとデベロップメントの話は、子どもの発育とか発達でもよく出てくる話
で、グロースは量的な変化、デベロップメントは質的な変化という話をしているので、とて
もよく理解できます。子どもの領域であっても、体格で言うグロースはほぼ伸びないとい
うことが分かっています。専門とする運動の領域においても、数値を伸ばすグロースはナンセ
ンスになってきていて、遊びや運動の中身、質的なことを考えるという方にシフトしてきて
います。

「つながる」を見ても、子どもの質的なところでのつながり、仲間が一番大事だと思っ
ています。

残念なことに、現実的には豊田市に限らず我が国は、子ども同士のつながりが弱く、違う

世代と遊ぶ率が日本と韓国は極めて低いとされています。DX化などが進めば進むほど、つながりがなくなってきたと感じています。

場所や空間というものが不足してきており、公園の面積は増えていても、お金のかかる場所ばかりで使えるものは減っており、結局つながらなくなっています。

昔当たり前だった広場が今はないので、広場を無料で使って良いというだけで子どもが幸せを感じる時代になっています。今の技術に適応することも大事ですが、それでつながりを奪ってしまったり、そこで上手くつなげれない子達が、コロナ禍で特に苦しい思いをしていたりという現実もあります。そこを行政としていかに支え、つながりを与えるかが重要と考えます。

部活動の地域移行にも関わっていますが、多世代で、地域、教育が関わり合いながら、教育に携わる人間と地域の間が繋がると、理想的な価値が形成されていくのではないかと期待しています。

合計特殊出生率1.8は非現実的に感じますが、子どもにはより身近なつながりの場やチャンスが必要と考えます。

今の子ども達世代は、我々には想像のつかない生活時間構造をしており、そこに我々、大人や社会として伝えたいことを経験できる場をどういう風に入れ込むかが重要だと思います。生活時間構造が違う人間が保護者になってきています。質的な部分の発信も強めていって欲しいと思っています。

(会長)

これからの社会の担い手である子ども達の問題として、孤立ということが言われていますが、従来の縦割り、年齢割で縦横にスライスされ、区分けされることによって合理性を追求した社会の在り方が行き詰ってしまっており、新しい人間観やつながりをどう計画に落とし込んで、実際の生活の中で活用できる形に作り上げていくのかが問われているという御指摘だったと思います。

(I委員)

資料前半と後半のミライビジョンを比べると、デジタル化のトーンが薄くなっている気がしました。生活面、市民暮らしのデジタル化と企業産業基盤のデジタル化はリンクしていると考えています。市民生活の中でいろんなことがデジタル化されることによって、市民の意識や便利さも変わってきます。例えば、生活面では、育児や介護もデジタル化でかなり便利になることが多いと思います。

地域の中小企業のデジタル化が進むと、中小企業の活性化や競争力につながると思っています。デジタル化を進めるということで「3つの変える」のうち、「行動を変える」がかなり期待できるのではないかと思います。

また、「思考を変える」というところでは、豊田市は世界的な企業があり、国際意識の高い方が多く、市内に在住する外国人の方もたくさんいらっしゃると思います。そういう方々と交流を深めることも、思考を変えるところでかなり役立つのではと思っています。

国際化といった面から思考を変える、考えるということも豊田市ならではの特徴になるのではないかと考えます。

(会長)

今回の方向性である「3つの変える」に関して、デジタル化をもう少し強調して、デジタ

ル化による意識、生活上の変化も押さえるべきということ、もう一つは国際化の部分の扱うべきではないかという御発言であったと思います。

(J委員)

コロナ禍になり、外国から訪問される方は減少しており、豊田市に在住している方とどうつながっていくかということに重点をおいて取り組んでいます。

現在、豊田市にはブラジル人が約6千人、ベトナム人が約3千人、中国人が約2千人住んでおり、新しく入ってくる方と、長く住んで日本語も良く理解でき、豊田市民に溶け込んでいる方がいます。新しく入ってくる方に、暮らしやルールについて伝えようとしたときに、長く住んでいる方を通じてつながることができます。

国同士のつながりがあり、また共助の助け合いの中でつながりができ、徐々に言葉が分かるようになり、私たち支援団体ともつながるようになります。コロナの影響で、そういう構造に変わってきていると感じます。全ての市民が多様な価値観を認識し認め合うという意識を持つと本当に良いまちになると考え、そこに一生懸命努力しています。

(会長)

定住外国人との多文化共生について、多様性のある共生社会をどうつくるのかという御指摘だったと思います。福祉という領域につながっていくと思いますが、いかがでしょうか。

(K委員)

資料の中で、幸福とは何かということが少し曖昧で、豊田市がどうあれば市民が幸せになるのか、少し分かりにくいので、その辺をもう少し記載できると良いと思います。

今年10月に、豊田市は「地域共生社会推進サミット」という大きなイベントを行いますが、資料の中に地域共生社会という言葉が全く入っていないのを残念に思います。つながりなど、そういう趣旨の言葉はたくさん書かれていますが、具体の表現を入れながら、サミットの成果も発信できると良いと思います。

(会長)

つながりをベースにすると書かれていますが、もう少し具体化し、地域共生社会などを書きこめると良いという御発言だと思います。

(L委員)

今の御発言に重なりますが、福祉と言うと、活力、発展と真逆に捉えられてきたかと思いますが、地域共生社会という考え方は、従来支えられる立場であった方々が、支援を受けるだけではなく、自分らしく地域で活躍できるような地域社会を目指していこうというチャレンジだと思っています。人口減や高齢化の課題はありますが、そういった課題を分野や立場を変えて色んな人の力を重ねていくことで解決していくことはできないかという発想や、多様な力が重なり合うことや異質な皆さんが出会いながら新しい価値を見出していく、そういう点は素晴らしいと思っています。

発想の転換をしていくときに、行政は縦割りだと感じます。そこに横串を刺していくことがすごく大切と思っています。行政の組織をどう変えていくかで、地域の皆さんも変わっていくと考えます。福祉など分野を限定するのではなく、そこがごちゃ混ぜになって、つながりあって、その出会いが新しい仕組みや価値を作り出していく。そういう発想の転換をしていきたいと思っています。

福祉の位置付けも、困っている人をどう支援していくかだけでなく、新たな価値を見出し

ていく、そういうフィールドとしてこの計画の中に位置付けていただきたいと思いますし、地域共生社会という言葉が相応しいのであれば、そういう発想で進めていただきたいと思います。同時に行政の皆さんにも新しいチャレンジをして欲しいと思います。

(会長)

今、厚生労働省も地域社会づくりを進めていて、従来の縦割りを越えながら横に融合させていく中で、地域社会を福祉社会、共生社会に変えようという動きが強くなっています。

そういう動きの中で、従来の組織を組み替えることが連動できると良いという御意見だったと思います。

(M委員)

先ほどウェルビーイングの話がありましたが、豊田加茂医師会でも今後、豊田加茂ウェルビーイング研究会を立ち上げる予定です。審議会では健康な方々の話が多いかもしれませんが、健康を害した方も同じように、ウェルビーイングからスタートして、医療・介護・福祉の人が集まって、自己決定権をどう支えていくか、アドバンスライフプランニングとして本人の希望を叶えていくことを、豊田加茂医師会で進めています。

健康寿命の延伸について、全国的な考え方と言うと、健康寿命はこの20年かなり伸びましたが、本当の寿命も延びており、男性で9年位、女性で12年位、健康寿命と本当の寿命の差が縮まっています。健康寿命を延ばすことはとても重要ですが、健康寿命と平均余命の差をどう縮めていくか。また、健康を害した人も幸せと感じる、ウェルビーイングと感じられる、そういう社会を作っていきたいと思っています。

羅針盤はどこかを示しているものですが、「つながる つくる 暮らし楽しむまち・とよた」を示すのか、それとも、その真意はウェルビーイングを示すのか、目的は曖昧でも良いかもしれませんが、何を指しているか共通認識は必要と考えます。

(会長)

医師の立場から、健常者だけではなくて、健康でない方も含めて、幸せを感じられるような社会の在り方、つながり、人々の関わり、共生ということも捉えて、計画の中に入れていく必要があります、それが豊田市全体のウェルビーイングを高めることにつながる、という御発言だったと思います。

また、羅針盤については、どこが北極星か考えていけない、という御発言でした。

(N委員)

今回の計画期間、2025年から2034年は、気候変動や脱炭素の関係では、生き残りをかけた特別な10年間です。気候変動・脱炭素関連では2030年に半減、自動車関連では2035年にノンカーボンの車しか売れなくなる。特に、豊田市にとっては特別な10年間だと思っておりますので、グローバルな制約条件をはっきりと認識する必要があると考えます。豊田市は普通のまちと違ってグローバルな動きと直接つながっているまちであり、グローバルな視点と、中でつながって循環する視点と二層構造になっています。

一緒に議論すると構造的に見えにくくなるので、その使い分けを上手く整理する必要があると思います。日々接している自動車関連産業はもっと深刻に変化しており、その危機感を市とも共有したいと思っております。

(会長)

社会的に大きな変動期に入っており、産業構造の大きな転換、気候変動、私たちの日常生活の在り方に関わっています。そのことを考慮しながら総合計画の在り方、構造を考えていく必要があるという御意見だったと思います。

(O委員)

市民と行政が共働する中で、行政がこう変わってくれないと困るという話が多すぎると行政も委縮し疲れてしまうと感ずみます。市民側の前向きな要望を総合計画の中に取り込んでいけるといいのか、それは市民として動きを進めていくことなのか、これから考えていこうと思っています。

新とよパークと呼ばれる、新豊田駅前の広場の活動について、広場に関わる市民として、在住者だけでなく、在勤者やたまたま営業で豊田市に来たことを契機に、名古屋から会議に参加して広場の運営を考えてくれる人もいます。

関係人口まで含めた豊田市の魅力や関わり方を提示して、豊田市は住まなくても、こんな関わり方もあるんだということを、計画を通して可視化していけると良いと思います。

(会長)

自治の在り方について、住民が行政にお任せですとか、税金を払っているからサービスを提供すべきという議論が起こりがちですが、本来は納税が義務であるということも考えると、住民がメンバーとして関わることで自治体が成り立っているということ再認識する必要があります。また、働くだけの場所ではなく、魅力的なまちができれば、豊田市に住みたいという動きが出てくるのではないかと、そんな計画になったら良いというお話だと思っています。

(P委員)

人口の研究者ですので、人口関係の話をしみますと、この計画は、今後予測される人口減少社会を前提に検討を進めるのは大変良いと思います。一方で少子高齢化の急速な進展は、社会を対応させるためのコストが高いため、人口ピラミッドの急激な変化を避けるような少子化対策は重要なのではないかと考えています。また、人口減少を受け入れる、規模のシュリンクを許すということは、効率が上がらないと持続可能ではなくなります。そのためには、先ほど指摘があったようにデジタル化とか技術革新が重要になると考えます。一方で技術の変化にすぐに適応できない人たちもたくさんいらっしゃるため、行政としてはそういう方への配慮も重要だと思っています。効率化を進め、社会が変わっていけば将来的にいらなくなるものもあると思います。

「あるものを生かす」発想への転換というお話がありましたが、既存のものを評価し、将来生かせるのか、変えることができるのか、今のうちに整理しておいた方が良いと思いました。

(会長)

人口学の立場から、これからの人口減、特に少子化と高齢化をどう受け止めるのか、日本全体が急激な人口減少の時期に入っており、それをどう受け止めるのか。例えば効率化として、今あるものを評価した上できっちり使いながら、新しい社会に対応できるような仕組みをどう作っていくのかということが問われている、という御発言だったと思います。

(Q委員)

昨日まで郡上市に会議で行き、豊田市は自動車産業があるから羨ましいと言われました。豊田市は41万人の人口がいますが、高齢者クラブでは、山村部の方の考え方と都市部の方の

考え方が違い、山村部へ行くとそれぞれの会長さんが真剣にやっていて、比率で言うと人口の多い都市部のクラブの方が、会員数が下がっています。

一つの案として、これだけのインターチェンジを持っているまちに、県外から客を集める郊外型の大きな店舗がなく、買い物は名古屋や岡崎に、食は安城、刈谷に流れているのではないのでしょうか。豊田は、自動車産業のおかげで潤ってきましたが、その影が埋まっていないように思います。そこを今後意識するともっと良い豊田市になるのではないのでしょうか。

方向性について、2050年を展望していますが、人口減少はもっと早いと思います。今後は具体論を入れて話し合いをしないと、方向性だけ話していてもなかなか掴むことがないと感じます。

行政の横のつながりもあるべきですが、我々高齢者の関係する団体も多くあり、同じ目標持っているのにやることはバラバラなので、横のつながりを持つことがまちづくりであり、活性化であり、地域共生社会だと感じました。

(会長)

まだ豊田市はトヨタ自動車依存の時代から抜け出せておらず、住民の方の生活の在り方を見ながら計画を立てていけたらという御発言だったと思います。

(R委員)

私自身子どもがいて、暮らしやすくなるまちには賛同しています。そういう方向性を考えたとき、住みやすいというポイントが上がっていますが、グラフを見ると、「住みよい」より「どちらかと言えば住みよい」の方が多くなっています。プラスの結果ではありますが、データから見える現状の市民の課題感が資料にあった方が良いと感じました。

(事務局)

課題の整理という点では、資料が薄く感じられるかもしれませんが、課題を踏まえながら進めていきます。課題解決型から、今後は先の読めない時代の中で、ある程度の共通理念を持ってめざす方向に進んでいくということに切り替えていきたいため、課題を細かく表記していないという意図もあります。

(R委員)

意図は分かりましたが、現状の課題の延長線上で見えてくるものもあると考えます。

(S委員)

自分は、豊田市民ではなく、名古屋から30年以上この地に仕事にきています。豊田市はトヨタ自動車があって、地域の方の所得も高く、富裕層が多いということですが、残念ながら豊田市駅前には全然人が回流しておらず、駅は日当たり20万人以上の方が利用されていますが、対流性、回遊性がなく、駅の賑わいが全く感じられないと思います。商業ビルもテナントが入らなくて困っているという相談を受けています。

豊田市民の方を幸せにということで、広い意味で全体を考えての総合計画だと思いますが、駅前が賑わっていないのはどういうことかと常々思っています。駅前で人が歩いて座って話をして、そういう光景が見られるまちであるべきと日々感じておりますので、そういうところも、御議論いただければと思っています。

(会長)

今の御発言は、都市構造を検討する中で、(仮)えきちか居住誘導エリアですとか(仮)くらし機能連携エリア等に関わることだと思います。

(T委員)

つながるという、精神的な豊かさの話、地域共生社会をつくっていこうという話もあって、なるほどと思いましたが、経済的な豊かさと精神的な豊かさは相反するものではなく、当然両立するものでもあると考えます。経済的な豊かさが無い社会で、本当に精神的なつながりだけでどれだけ幸せになれるのか、という思いもあります。既に我々は経済的な豊かさが満ち足りているからこそ、次の段階へというようなことが口にできる余裕があるのかもしれないと思います。

これからは、人口は減っていくし、高齢化ということで社会コストが高くなっていきます。経済力が落ちれば、円も安くなって、我々の身の回りのものがすべて高くなっていく。そうすると豊かさに慣れた我々は辛い時代を迎えていくというリスクだってあるかもしれないと考えます。その中でも心のつながりとか、地域のつながり、共生社会という成熟した社会が成立しており、我々の意識が変わっていれば、その痛みも吸収できて、また、次に向けてチャレンジしていくことができるのかもしれないと考えます。

言いたいのはどちらも大事ですよという話です。経済活動を縮小させず、持ちこたえ、次の成長につなげるための力を身に着けるということも、やっていく必要があるのではないかと思います。

先ほどR委員の話を聞いていて、本当に暮らしやすいまちになれば、人口の社会減は止まると思っています。もちろん施策を打ったタイミングと結果は時間のずれがあるので、今の社会流出、転出超過が、今までやってきたことの成果が表れる前なのか結果なのかは分かりませんが、少なくとも長い目で見れば、成果は見えると思います。

社会流出が多いのは、まだ皆さんが暮らしやすいと思っていないのではないのでしょうか。参考資料で豊田市外に転出を考えている人が10%おり、4万人が市外に出たいと思っているのは危機感を持って施策を考える余地があると思っています。

住みやすい人が年々上がってきているのは良いことですが、だから良いではなくて、市外に出たい方に着目したほうがいいのかも。25歳から35歳という子育て世代の方であり、豊田市の人口を増やすか減らすかを左右する人です。生産者側にまだ回って頑張ってもらわないといけないう人達が一番流出しており、彼らが我々に何を期待しているのかを目を背けずに、直視して、何をすべきか考えるということが必要ではないかと思います。

(会長)

経済の基盤をつくることと、心の豊かさをつくることをどのように両立させるのか。また、上手くいっていないということの一つの象徴として、若い世代が転出を考えているということがあっていいのか、そこをきっちり直視して計画を考えていくということかと思いません。

(U委員)

総合計画がつくられていく過程に携わることができ光栄だと感じています。感想になりますが、それぞれの分野の方の御意見等が交わされてまちの計画ができていくんだなと思いました。自分の団体の活動にも参考にさせていただきたいと思いました。

つながるという部分、心身ともに健康ということ、我々の団体もパートナーシップやウェルビーイングをテーマに今年度活動しています。そういったこととも親和性があり、共感できました。学ばせていただきながら、この市の発展のために活動していきたいと思っています。

(会長)

30分延長してしまいましたが、本日はここまでにさせていただきます。次回はより具体的な内容に入っていきますので、ぜひ皆さんで御審議いただきたいと考えています。

(市長)

本日は、ありがとうございました。幅広い御意見をいただきました。第8次総合計画の「つながる つくる暮らし楽しむまち・とよた」という将来都市像は、私もこだわりました。今回改めて、資料③-1で「(仮称)ミライビジョン2050」があり、2050年から解き起こす将来都市像と改めて見たときに、たぶん逆に来るのだろうなという風に感じました。

「暮らし楽しむまち」というものが、これも今少し悩んでいます。いつの時代も市民一人ひとりの皆さんが、自分らしく暮らしを楽しめるまち、どんな状況であろうとどんな時代になろうと、2050年に向けてそういうまちをめざしていく。その時々、そういうまちをめざるのであれば、一体何をつくらないといけないのか、ものだとか価値だとかシステムだとか社会だとか、とブレークダウンして、何がつながらないといけないのか、そういう逆目になると感じました。

つくるとかつながるを議論するときに、縦割りの話がありました。敢えて言うなら、関係性を変えろという視点を持ちながら検討する必要があると思いました。問題意識としては、

「暮らし楽しむまち」というのはそういうのんきなことで良いのかと感じました。冒頭のA委員のビデオメッセージを見て、クローンだとか、アンドロイドだとか私が思ったのは、私の知っているの話し方ではないことに、ものすごく違和感がありました。でも近い将来、過去の発言やジョークも織り交ぜてアウトプットしていくと、見事なものが出てくるはず。自分が言いたかったことがAIで再現できてしまう。つまり、自分とは何か。自分が自分らしくいられるのは自分しかいないということが、近い将来持ちづらくなる。そういうときに最後に出すイメージが、「暮らし楽しむまち」という本当にのんきな将来都市像なのかなということ少し感じています。将来都市像の読み方が変わってくるなと思いました。

もう一点、別のところでSDGsの話をしていて、SDGsの169のターゲットにかかわらず、ローカルターゲットを設定しようという話が出ました。ローカルターゲットと総合計画をぶつけることによって、総合計画が、豊田市だけの、豊田市民だけの総合計画からもう少し枠を広げることができるかもしれないと思いました。

地域共生社会も同じことだと思っており、大きな横割りのテーマをぶつけることによって、総合計画について、もう少し具体的で豊かな議論ができると思っています。今日は具体的話に入る前段の話だったので、少し分かりにくい議論だったと思いますが、色々な意見が出ましたので、それを踏まえて次回以降もやっていきたいと思っています。ありがとうございます。

(会長)

哲学的な、自己とは何か、ということが問われてしまうということだと思っています。私の専門の教育学もそうですが、私とは何か分からなくなる時代、個人が意思を持って生活しているという私たちが生きてきた近代社会の根幹が揺らぐことが起こり始めている時代に入っているのかもしれない。

「暮らし楽しむまち」がのんきなことなのかを含めまして、むしろ新しい形で個人が暮らし楽しむまちをつくっていくということも含めて、議論していきたいと思っていますので、またぜひともよろしく願います。事務局に議事をお返しします。

○事務局

■ 企画政策部長あいさつ

まだ時間が足らなかったかと思いますが、次回以降御意見を生かしながら組み立ててまいりたいと思っています。

■ 事務局連絡

○事務局 次回審議会日程

: 令和5年7月24日開催

(終了 午後5時30分)